er-sensei understood our circumstances that we could not keep him at home, kindly took him in at ARK. How vigorously and fabulously Chobi worked after s well known to many people; he became a member of Oliver-sensei's family grew up to be a representative of ARK. He even had his own column 'CHOBI SEI' in ARK's newsletter.

94, Chobi visited his hometown, Kasumi-cho as a representative of ARK. He nvited as a guest by a local international friendship association and stood on tage with Oliver-sensei who made a speech on animal welfare. On arriving sumi-cho, Chobi was welcomed by great many people and children, who put land around his neck. He played the part of the representative calmly and r all through the ceremonies.

bi, chobi" means "little by little" in the Tajima dialect. It was soon after ing him that we noticed the dog had the habit of being somewhat reserved; ılked in smaller steps, and ate in smaller bites than the others. That was why lled him Chobi.

Chobi used to hide behind the hydrangea shrubs. 'Ajisai' is also called a changes' by another name, and its floral language is 'changeable.' At Chobi played many different parts such as P.R. manager, control tower, etc., good-will envoy, mascot and so on. He seemed to actively make 'seven armations.' He was not changeable, though; he was consistent in trusting etc., instead.

Id a guilty conscience about Chobi all the time; although we had managed sue him, he who had shown a total trust in us, we could not live with him for s reasons. Later, we were relieved to know, however, that Chobi was really at ARK, loved and cared for by Oliver-sensei and others.

Il always remember Chobi every spring from now on, when young gea leaves shoot out and grow into a beautiful hedge.

you so much, Oliver Sensei. you so much, Chobi.

## さよなら、チョビ



Chobi visiting the Sakuhana family, who had originally rescued him, at the Japan Sea. チョビと咲花ファミリー(助けてくれた恩人家族)、日本海の町で再会

1990年、但馬の山野に、うららかな陽ざしがふりそそぎ、若葉が芽吹き始める頃です。 兵庫県城崎郡香住町土生、土生峠の一本道を登りきったところに、ドライバー達の休憩場 所がありました。道路沿いにスペースがとられ、ベンチが二つ並んでいます。ベンチの後ろには、アジサイが十株ほど植えられていて、 垣根のように若葉をのばして、 藪のような茂みを作っていました。そのアジサイの茂みが、・捨て犬チョビの隠れ家だったのです。 ベンチの横に置かれたゴミカゴから、ドライバー達の残飯を見つけては、飢えをしのいでいたようです。

通勤路の帰り道、何気なくそこでひと息いれようとした主人が、アジサイの茂みにチラチラ動く、茶色の動物らしきものに目をとめたことが出会いでした。

「あれっ!キツネだろうか?」チョビの第一印象です。その動物は主人が近づいて来て、ベンチのすぐ前にしゃがみこんだので、コソコソと茂みの中に尻込みして隠れようとしました。でも何もせずただジッと自分を見つめている人間に、モジモジしていました。

「キツネじゃない。犬だ。」と気づいた主人が、 愛着を込めて片手を差し伸べたところ、犬は、 ススッとアジサイの茂みの中にもぐり3人。 もうアジサイの陰に隠れてしまいます。茂みの根本に、ドッグフードの入った皿を置いていくことが続きました。私達の毎日の話題は、その犬に始まり、その犬で終わりました。

そんな日々が、一週間ほど過ぎたでしょう か。ハッキリ姿を見せない犬が首輪をしてい て、それもかなりきつそうだ、ということに 気がついた時、先々にある心配事より、先ず 犬を保護することが大切と、私達は思い切り ました。夕方になってから、チョビを迎えに、 峠に出かけました。ベンチの下で、前足にア ゴをのせて、目を瞑っていたチョビは、私達 が近づくと、案の定、藪の中にその姿勢のま ま、ズルズルと後退して行こうとします。「い い子、いい子」と声をかけながら、チョビの 前足付け根のあたりをつかまえて、ゆっくり ベンチの下から出てきてもらいました。「キ ツネに間違われたにしては、随分と大きな体 格ねえ。」チョビの全身を初めて見た時、思 わず出た言葉です。

チョビは、赤い皮の首輪をしていました。首 輪をつけたまま捨てられてから、彼は成長し 続けた為に、もう指を入れる余裕もない程に、 首輪は彼の喉元を締め付けていました。皮膚 に食い込んでいなかったのが、不幸中の何よ りの幸いでした。ちょっと触れただけで、そ れまでおとなしかったチョビが、低いうなり 声をあげます。そんなチョビをなだめ、なだめ、 やっとのことで首輪がはずれた時には、これ から先の私達の心配事全てが解決してしまっ たと錯覚する程に、ホッとしてしまいました。 翌日、獣医さんの健康診断の結果、まだ乳歯 が残っているので推定一歳前後、栄養状態が 悪く、四肢もヒョロヒョロとしていますが、 病気はなく、診察の間もおとなしく我慢でき る、良い性格をもっていることも判りました。 わが家の犬達、ころ太とポテトともすぐに馴 染む素直な性格です。散歩に行く時には、一 番体が大きくても幼いチョビが、二頭の後ろ をヒョコヒョコ楽しそうに、リードなしでつ いて歩きました。雑草がそよいでいる草野球 のグラウンドに、じゃれあいながら一緒に游 んだ 楽しい甲い虫 ふと目せるチョビの法

ません。オリバー先生の家族となり、アークを代表する犬に成長したのです。ニュースレターに、「チョビ先生」としてコラムをもつようになった程です。

1994年、チョビは、アークの代表として、 香住町にお里帰りを果たしました。町の国際 交流協会に招待されて、オリバー先生と一緒 に、動物愛護の講演会の壇上に立ったのです。 香住町に着いたチョビは、大勢の人々、子供 達の大歓迎を受け、ブーケを首に飾ってもら いました。そして、終始落ち着いた立派な態 度で、代表の役目を果たしたのでした。

"チョビチョビ"とは、少しずつ、ちょとず つという但馬の言葉です。

遠慮がちに少しずつ、普通の子なら一歩で行くところを二歩、三歩とチョビチョビ進む、一口で食べるものを二口、三口でチョビチョビ食べる、「チョビ」という名前は、保護して間もない頃の、彼のそんな仕草が所以です。

アークで暮らすようになっても、名前は変わることがありませんでしたが、チョビは、オリバー先生と巡り会えたことで、秘められていた素晴らしい性質をのびのびと開花させてもらい、幸せにその生涯を終えることが出来ました。

チョビが悲しい隠れ家にしていたアジサイは、「七変化」ともよばれ、花言葉は「移り気」です。チョビはアークで広報マネージャー、司令塔、先生、親善大使、そしてマスコット等、アジサイのような「七変化」の変身をして活躍し、「移り気」でなくその一生を通して、人と信頼を保ち続けました。

たとえどんな事情があったにせよ、私達を信じて身をまかせ、ついてきてくれたチョビを保護しただけで、一緒に暮らせなかったという自責の念を、私達はずっと心に抱き続けていました。しかし、アークでみんなに、そしてオリバー先生に愛され見守られた、チョビの暮らしと活躍を知るにつれて、そんな思いは彼の幸せを喜ぶ気持ちに変わっていきました。チョビが、本当の幸福の中にいることがわかったからです。

マジサイの芋芋がゆび この芋丼の芋しい米

## ジェフ ブライアント